

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 『キングコーパス』の構築と活用

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2019-02-14 キーワード: UniDic, 日本語歴史コーパス(CHJ) 作成者: 高橋, 雄太, TAKAHASHI, Yuta メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001654">https://doi.org/10.15084/00001654</a>

## 『キングコーパス』の構築と活用

高橋 雄太 (明治大学大学院・日本学術振興会) †

## Construction and Practical Use of “King Corpus”

Yuta Takahashi (Meiji University / Japan Society for the Promotion of Science)

## 要旨

本発表は、昭和期の雑誌『キング』を資料として構築した『キングコーパス』の設計と活用についてである。国立国語研究所の明治・大正期の『太陽』のコーパスに続く資料として、大衆雑誌『キング』を選定し、1933年と1941年でコーパスを構築した。『キングコーパス』の設計については、資料の選定方法や、字数、語数、記事数、著者数といった基礎的な規模を示し、また文体・記事ジャンル・品詞分布の観点から『太陽』との連続性について検討した。『キングコーパス』の活用については、和語の表記を例に、「当用漢字音訓表」との比較を行った。「当用漢字音訓表」採用の和語の動詞を対象に、各語の使用表記の一致度を計測した。その結果、経年変化で一致度が高くなる傾向があることがわかり、「当用漢字音訓表」の設計の背景に、近代における用字法の変化があることが明らかになった。

## 1. はじめに

近年、近代語の雑誌コーパスが構築されたことにより、量的・通時的に言語を分析することが可能になり、明治期から大正期にかけての言語の変化の様相が、詳らかに解明されるようになった。稿者はこれまで、特に『太陽』のコーパスを用いて和語の表記の変遷を研究し、明治期から大正期にかけて、「1語複数表記」から「1語1表記」に向かうこと(高橋2016)や、複数表記語においては「1義複数表記」から「1義1表記」に向かう(高橋2015)など、表記が「揺れ」から「安定」に向かうことを明らかにしてきた。しかしながら、研究を進める上では、『太陽』の最終年である1925(大正14)年では、言語の変化が完了しない事例が少なからず確認された。

図1には、「タノム」という語の各表記の使用記事率の推移を示した。「タノム」には近代では「頼」と「恃」の表記が用いられ、経年変化によって「恃」の使用が減少していく過程を観察できる。しかしながら、1925年の段階では、第2表記である「恃」も8.1%使用されており、1925年以降の調査が望まれた。

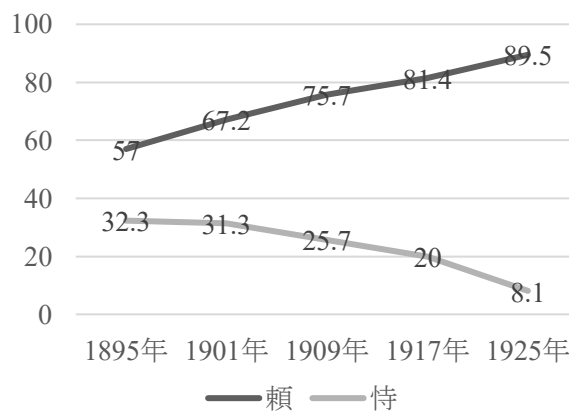


図1 タノムの各表記の使用記事率

† yutati.h@gmail.com

また、表記の歴史における重大な転換点の一つと考えられる 1946 年の「当用漢字表」に至るまでの変遷や、歴史区分としての狭義の「近代」の通時的な分析など、近代語の表記の研究においては、昭和前期の調査の必要性が非常に高いと考えられる。

『太陽』をはじめとした近代語のコーパスとの通時的分析を、計量的に、また網羅的に行う上では、昭和前期のコーパスを構築することが望ましいと考える。そこで、本研究では、『太陽』に続く資料として、昭和前期の資料を選定し、独自にコーパスを構築した。以下 2 節では、資料の選定方法及びその設計について記し、3 節では構築したコーパスと『太陽』を合わせ用いて、和語の表記の調査を行う。

## 2. 『キングコーパス』の構築

### 2.1 資料の選定

近代語のコーパスの構築対象として『太陽』が選定された理由としては、『太陽』が「分量の多さ」、「ジャンルの広さ」、「執筆陣の多彩さ」、「読者層の厚さ」を持ち、近代語の資料として代表性を持つことが指摘されている(田中 2012)。そのことを受けて、『太陽』に続く資料として、多様な記事ジャンルを擁する①総合雑誌であることを条件とした。次に、昭和前期(1945 年まで)を通じて観察することの出来る②長期刊行の雑誌であり、かつ月刊誌など継続して刊行されて③分量が多い資料に絞った。また、この時代の雑誌のほとんどにあてはまることだが、『太陽』が大正末期には口語記事が 95%以上を占めていたことを受けて、④口語記事が中心であることを条件とした。

以上の①～④の条件を満たす資料としては、

『キング』(旧：大日本雄辯講談社 / 現：講談社刊行, 1925 年～1957 年)

『改造』(改造社刊行, 1919 年～1955 年)

『中央公論』(旧：反省会 / 現：中央公論新社刊行, 1887 年～現在)

の 3 誌があげられる。この 3 誌からさらに 1 誌を選定する上では、『太陽』が後年になるほど総ルビ化していったことを受けて、⑤総ルビ(『キング』は総ルビ、『改造』と『中央公論』はパラルビ)であること、その他、⑥戦時下の言語統制の影響の少なさ(『改造』と『中央公論』は横浜事件をきっかけに 1944 年に軍部から廃刊勧告を受けた後、1946 年に両誌とも復刊)、⑦当時最も読まれたことを重視して、『キング』を構築対象として選定した。

⑤の総ルビについては、特にルビがないと読み分けのできない事例において、整備がしやすいという利点もある。⑥については、『キング』も題名が敵性語であることから、1943 年から 1945 年にかけて『キング 改題 富士』とされる(1946 年以降は『キング』に戻される)が、内部の記事構成などに大きな変化はなく、『改造』や『中央公論』に比して、言論の統制の影響は少なかったと考えられる。⑦については、2.2 で述べる。

以上の①～⑦の条件から、総合的に判断して、『キング』を『太陽』に続く資料として選定し、コーパスを構築することとした。

### 2.2 雑誌『キング』の概要

『キング』は、1925(大正 14)年から 1957(昭和 32)年にかけて大日本雄辯講談社(現講談社)より刊行された、総合雑誌である。『キング』が創刊される以前の大正期には、大日本雄辯会講談社からは『雄辯』(政治)、『面白俱樂部』『少年俱樂部』『少女俱樂部』(児童向け)、『婦人くらぶ』(家庭、女性向け)などが発行され、特定の層にターゲットを絞る雑誌の「細

1 同条件を満たす資料としては『文芸春秋』もあげられるが、同誌は 1930 年代までは文学色が非常に強く、①総合雑誌としてのジャンルの不偏性が薄いことが危惧されたため、候補から除外した。

部化」が進められていた。しかしながら、上記の『キング』の方針のように、万人に読まれる雑誌を目指し、1920年に『雄辯』を総合雑誌化した『現代』を創刊、その流れを受けて、青少年向け、女性向けの記事も含んだ『キング』の刊行に至った(佐藤 2002)。

創刊号には、『キング』の編集方針について、以下の(1)の文言が載せられた。近代化に伴い、書物が一部の学のある人間のためのものから、国民誰しもが読むことのできる媒体に変容したことを受けて、年齢や身分に関係なく読むことができる雑誌を目指していたことが分かる。全ページにルビが施されているのも、読者層の拡大を目指した方針の一つであると考えられる。『キング』創刊号には同様にキャッチフレーズとして「一家一冊」「面白くてためになる」「国民大衆雑誌」と謳われており、雑誌では史上初めて100万部の売り上げを達成している。創刊号の発行部数74万部は、大正14年の『中央公論』の8万部、『主婦の友』24万部(日本近代文学館 1977)と比較しても、群を抜いて多く、また、1928年11月号の最高発行部数150万部は、雑誌誌上最高であり(社史編纂委員会 1959)、『キング』はこの時代もっとも広く読まれた雑誌であると考えられる。その時代に最もよく読まれた雑誌という点では、既存の『国民之友』と『太陽』にも共通し(近藤 2014)、両誌との連続性があると考えられる。

- (1)「職業・階級・貧富貴賤の差別なく、老若男女、知識あるものも、知識なきものも、翕然として茲に集まり、限りなき興味を以て耽読しつつある間に、自ずから高尚なる気品と、堅固なる道念とを涵養せられ、一世是に由ってその風を改むるに至らんこと」

『キング』には全年齢層が楽しめるように記事のジャンルが幅広く取られており、教養的なものでは文学、哲学、科学、伝記、教訓、経済、軍事など、娯楽的なものでは大衆小説、講談、落語、童話、踊り、替え歌などがあり、漫画やなぞなぞといった子供向けのページも盛り込まれている。著者層も非常に幅広く、北原白秋や菊池寛、佐々木味津三といった時代を代表する作家から、近衛文麿や齋藤実をはじめとした政治家、その他にも軍人、実業家、漫画家、翻訳家、医者、教師、噺家、俳優、主婦、など多岐にわたっている。この点からも、『キング』はジャンルや著者層において、多様性が担保されているといえるだろう。

## 2. 3 『キングコーパス』の設計

### 2. 3. 1 規模

近代語の雑誌コーパスが、『国民之友』(1887/1888年)、『太陽』(1895年、1901年、1909年、1917年、1925年)のようにおおよそ8年おきに構築されていることを受け、『太陽』の最終年の1925年から8年おきに、1933年(昭和8年)と1941年(昭和16年)を構築対象とした。規模としては、35万語～40万語を想定し、1933年は2月・6月号、1941年は2月・6月・10月号<sup>2</sup>の全文(表紙・目次・奥付・図表・広告、及び新刊紹介や懸賞の当選者発表記事など固有

<sup>2</sup> 1933年の2冊、1941年を3冊としたのは、戦時下の1941年に紙の配給が激減したことを受け、雑誌のサイズ・ページ数を削減した(講談社八十年史編集委員会 1990)ため、年によってテキストの分量が大きく変わるためである。1933年は1冊あたり600ページ前後、1941年は300ページ前後である。

名詞の羅列が中心で本文が少ない記事は除く)を電子テキスト化した。以下の表1には、『太陽』、『キング』のそれぞれの年次別の文字数、語数<sup>3</sup>、記事数、著者数を示した。

表1 『太陽』と『キング』の年次と規模

雑誌名	年	文字数	語数	記事数	著者数
『太陽』	1895	3340782 字	202 万語	722 記事	1000 名超
	1901	3239029 字	197 万語	624 記事	
	1909	3102795 字	187 万語	746 記事	
	1917	2960783 字	180 万語	527 記事	
	1925	3423588 字	203 万語	1063 記事	
『キング』	1933	645773 字	37 万語	155 記事	123 名超
	1941	684350 字	41 万語	152 記事	110 名超

(各情報は、『太陽』は国立国語研究所 2005・服部ほか 2016 より)

『キングコーパス』は年次およそ 40 万語で、『太陽』の各年次からは、約 20%程度の規模となる。この規模の差は非常に大きく、特に頻度が低い周辺的な語ほど、『キングコーパス』には出現しにくいことが考えられるが、ある程度の頻度がある中～高頻度語を対象とすれば、コーパスとしての不偏性は担保されると考えられる。

### 2. 3. 2 記事ジャンル

次に、図書館での書籍の分類に用いられる「日本十進分類法(NDC)」を利用して、『太陽』(国立国語研究所 2005)と『キング』の記事ジャンルの記事数を表2に示す。それぞれの()内には、比率(%)を示した。

表2 『太陽』と『キング』の年次別ジャンル一覧

NDC	1895 年	1901 年	1909 年	1917 年	1925 年	1933 年	1941 年
0 総記	22(3)	9(2)	46(7)	46(7)	218(21)	9(6)	0(0)
1 哲学	45(6)	46(8)	13(2)	8(2)	12(1)	15(10)	8(5)
2 歴史	78(11)	60(10)	34(6)	10(2)	83(9)	9(6)	6(4)
3 社会科学	201(29)	248(42)	288(47)	195(42)	191(23)	11(7)	45(30)
4 自然科学	36(5)	28(5)	34(5)	14(3)	33(5)	1(1)	5(3)
5 技術.工学	41(6)	35(7)	18(3)	16(4)	70(9)	4(3)	7(5)
6 産業	51(7)	51(9)	20(28)	6(2)	38(5)	0(0)	2(0)
7 芸術.美術	60(9)	14(2)	3(0)	46(11)	74(8)	40(26)	21(14)
8 言語	12(2)	4(1)	3(0)	2(0)	2(0)	1(1)	0(0)
9 文学	153(22)	97(16)	133(22)	77(17)	147(18)	65(42)	58(38)
計	699	592	617	467	868	155	152

『キング』と『太陽』を比較すると、『キング』の方が「文学」の比率が大きい。これは1 記事 500 字に満たない小エッセイや句集のような記事が多いことも寄与していると考えられるが、文学色の強かった媒体であったといえる。『太陽』で最も比率の高かった「社会科学」は、『キング』では、1941 年は、政治・経済・軍事など幅広い記事が収録されているが、1933 年では 1941 年に比して軍事や戦争にまつわる記事がなく、比率が低くなったと考

<sup>3</sup> 国立国語研究所の短単位規程による。『キング』については、Web 茶まめによる形態素解析による結果である。

えられる。『キング』1933年では、「社会科学」の比率が低い代わりに、「芸術・美術」の比率が高いが、絵画などに加えて特に演劇・スポーツ・娯楽など生活に密接な内容の記事が多いことが寄与していると考えられる。また、1925年は「総記」の比率が極めて高くなっているが、国立国語研究所(2005)によると、これには新刊紹介の記事が多数含まれており、『キングコーパス』では新刊紹介を除外したことが、比率の差に表われたのだと思われる。

以上観察したとおり、『キング』1933年は「社会科学」の比率が「文学」より小さい点で『太陽』とは不連続であるといえ、『キングコーパス』を用いた調査においては、この相違点を把握した上で分析する必要がある。ただし、幅広いジャンルの記事を収録しており、ジャンルの不偏性という点は担保されているといえるだろう。

### 2. 3. 3 文体

文体についても検討する。近代語コーパスでは、文末辞にしたがって、「なり/たり/あり/けり/り/つ/ぬ/き/べし」をとれば文語、「です/ます/ござる/である/だ/た」をとれば口語と認定されている。「中納言」ではその他に「韻文」と「混在」を認めているが、本稿では国立国語研究所(2005)にしたがい、どちらがより中心的であるかによっていずれかに判別した。表3には、年次別の文体別記事数と比率を示した。

表3 『太陽』と『キング』の年次別文体別記事数

記事	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年	1933年	1941年
総記事数	729	635	652	504	889	156	152
口語記事	39(5%)	168(27%)	376(58%)	355(70%)	835(94%)	153(98%)	150(99%)
文語記事	689(95%)	467(74%)	267(41%)	129(26%)	52(6%)	3(2%)	2(1%)

『太陽』では明治期から大正期にかけて、文語記事が減少し、口語記事が増加する。『キング』はその流れの上にあるといえ、韻文(北原白秋「丈夫の唄」、句集「近作玉什」など)を除いて全て口語で書かれている。このことから、『太陽』をはじめとした明治大正期のテキストの口語化の延長上に、『キング』もあるといえるだろう。

### 2. 3. 4 品詞分布

最後に、品詞の比率を確認する。図2には、『太陽』と『キング』のそれぞれの品詞分布を示した。

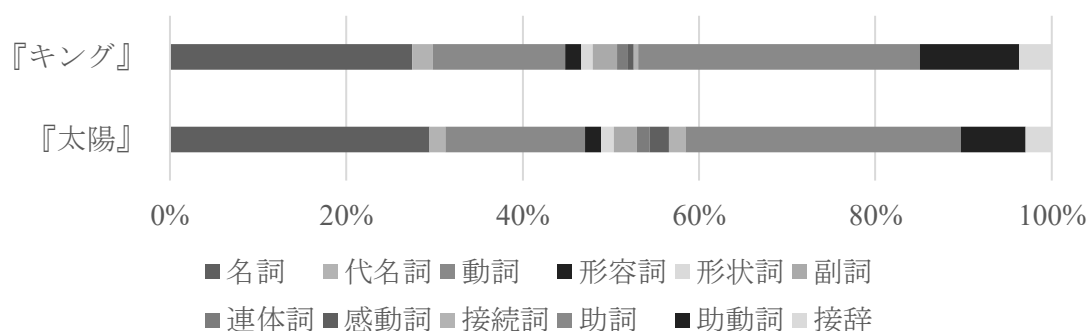


図2 『太陽』と『キング』の品詞分布

名詞・助詞・動詞・助動詞の順に比率が大きくそのほか小さい点で共通している。『キング』の方が助動詞の比率がやや大きいですが、全体として品詞分布は連続しており、大きな差異はないと考えられる。

## 2. 4 『キングコーパス』構築のまとめ

以上,2節では、『太陽』に続く資料の選定方法と、選定した『キング』を基に構築した『キングコーパス』の規模の設計を示した。2.3.2からは、記事ジャンル・文体・品詞分布の観点から『太陽』と『キング』の連続性を検討した。構築した『キングコーパス』は、ジャンルの多様性、執筆陣の多彩さ、文体、品詞分布で連続性を確認し、『太陽』と並び用いるに耐えうるデータとなったと考える。一方で、コーパスの規模は『太陽』に比べて大きく劣り、記事ジャンルの構成比率にも差異が見受けられた。分析対象の選定や用例分析の際には、この点を踏まえて調査する必要があることも確認した。

## 3. 『キングコーパス』の活用

### 3. 1 「当用漢字音訓表」採用訓との一致度の変遷

3節では、『太陽』と『キングコーパス』を用いて、構築の従来目的であった1946年の「当用漢字表」との対比を行う。

「当用漢字表」は、1946年に出された国語政策であり、公的文書や教科書、新聞、出版物などにおいて使用できる文字の制限を目的としている。1948年の「当用漢字別表」、文字の音訓を制限した「当用漢字音訓表」、字体を制限した1949年の「当用漢字字体表」、1973年の「当用漢字改定音訓表」の一連の告示をまとめて「当用漢字」と呼ばれ、1981年の「常用漢字表」の告示と共に廃止された。

本研究では、1946年の「当用漢字表」での採用字、及び1948年の「当用漢字音訓表」での採用訓と、近代雑誌コーパスにおける和語の表記の実態が、どの程度一致し、また変遷したかを分析する。

### 3. 2 調査方法

#### 3. 2. 1 語区分の設定

近代語のコーパスにおける語の区分は「語彙素」に依っており、語彙素は電子化辞書「UniDic」の区分に従って認定されている。「UniDic」の語区分は、『日本国語大辞典』を含む複数の辞書の見出し区分と、現代語のコーパスの用例を参考に区分がなされている(小椋ほか2011)。例えば、「UniDic」ではナラウという語を「習う」と「倣う」の2語にわけている。これは、ヲ格をとるかニ格をとるかによって意味が明確に分けられるための区分と思われるが、近代では「古い習慣に習う」といったように、格成分が必ずしも一致せず、また意味と表記の対応関係にも揺れが認められるという問題点が指摘できる。このことから、近代語のコーパスを用いた研究では、近代語の研究に合った区分の設定が望まれる。そこで、本稿では、『日本国語大辞典』の見出しの区分に従って語を区分し、ナラウの例では、同一見出しとしているので、単一の語ナラウとして扱う。

#### 3. 2. 2 調査対象語の選定

年次40万語規模の『キングコーパス』において、1年に20件程度の頻度が確保できるように、100万語あたりの相対頻度50以上の語、『太陽』と『キングコーパス』を合わせた統合コーパス(約1050万語)における頻度466以上の語を対象とする。この条件に該当する和語の自立語は650語あり、本稿ではそのうち最も語数の多い動詞267語を対象とする。このうち、①「入る(ハイル/イル)」や「出る(デル/イデル)」などルビがないと読み分けができない19語、②連用形がいずれの語か判別できない「借り(カ Ril/カル)」、③誤解析のパターン・数が突出して多く修正ができない「為る」、④複合語の「出来る」の22語とを除外した245語を、また、本稿では、「当用漢字音訓表」で訓が採用されていない22語についても除外し、223語を対象とする。

## 3. 2. 3 表記対応一致レベルの判定

223 語はそれぞれ、「当用漢字音訓表」で単一表記語、「当用漢字音訓表」で複数表記語に分けられる<sup>4</sup>。表 4 には、それぞれの語数と比率、いくつかの語例を示した。

表 4 分類別の語数と比率

表記実態	語数(比率)	語例
単一表記	194 語(78.9%)	仰ぐ, 遊ぶ, 与える, 当たる, 預かる, 集まる, 集める, 当てる, 怪しむ, 誤る, 争う, 改める, 有る, 歩く, 言う, 生きる, 行く, 急ぐ, 至る, 入れる, 伺う...
複数表記	29 語(11.8%)	合う, 上げる, 表わす, 現われる, 歌う, 打つ, 生まれる, 犯す, 送る, 起こす, 起こる, 収める, 押す, 顧みる, 変える, 変わる, 聞く, 差す, 立てる, 付く...

これら 223 語の表記の対応が、どの程度一致しているのかを各年次で判定するために、「当用漢字音訓表」にて各語の表記として採用されていない表記の使用記事率を利用する。冒頭に挙げたタノムを例に判定する。各表記の使用記事率は、その語が出現した記事数を 100%とした時の、各表記の出現記事数から算出した。以下の表 5 にはタノムの表記別の使用記事率を示したが、このうち「当用漢字音訓表」にてタノムの表記として採用されていない「恃」の使用記事率に注目する。この数値を  $x$  とすると、「 $x=0$ 」の場合 A, 「 $0<x\leq 5$ 」の場合 B, 「 $5<x\leq 20$ 」の場合 C, 「 $10<x$ 」の場合 D といったように、4 つのレベルに判定する。

表 5 タノムの表記別使用記事率と表記対応一致レベルの推移

表記	1895	1901	1909	1917	1925	1933	1941	当用
「頼」	57.0%	67.2%	75.7%	81.5%	89.5%	90.5%	92.9%	○
「恃」	32.3%	31.3%	25.7%	20.0%	8.1%	0%	3.6%	×
判定	D	D	D	D	C	A	B	

タノムの場合、1895 年から徐々に「恃」が使用されなくなり、特に 1933 年以降はタノムにはほぼ「頼」しか使用しなくなったことがわかる。このような判定を 223 語全てに行う。本研究では、A または B であれば「当用漢字音訓表」と一致、C または D であれば「当用漢字音訓表」と不一致と考える。

## 3. 3 調査結果

『太陽』と『キングコーパス』の年次別に、動詞 223 語につき 3.2.3 で判定した表記対応一致レベルの比率を示すと、図 3 の通りになる。

図 3 にみる通り、A+B の比率が 1895 年から 1941 年にかけて 20 ポイントほど上昇し、後年になるほど「当用漢字音訓表」との一致度が上昇していると考えられる。特に 1917 年から 1925 年の上昇が大きく、大正末期頃から、「当用漢字音訓表」の用字法により近い用字法になったといえるだろう。

また、レベル別に注目すると、D レベルも 1925 年を境に大きく減少し、D レベルから ABC レベルに移行する語が多いことがわかる。反対に、A レベルも増していく傾向にある

4 「当用漢字音訓表」では、動詞の自他、あるいは動詞形・形容詞形・形容動詞形・名詞系など複数の形のうち一つを示し、原則的に、他の形にも用いてよい旨が記載されている。例えば、「苦」には「ク|くるしい|にがい」とあるが「くるしむ」にも対応し、「変」に「ヘン|かわる」とあるが「かえる」にも対応していると考えられる。

ことが指摘できる。1933年や1941年で特にAレベルが多いのは、コーパスの規模が小さいために、逸脱した限定的な表記が出にくく、Bレベルが少なくなったことによるものであると考えられるが、一方でAレベル増加の延長線上にあることは間違いないだろう。

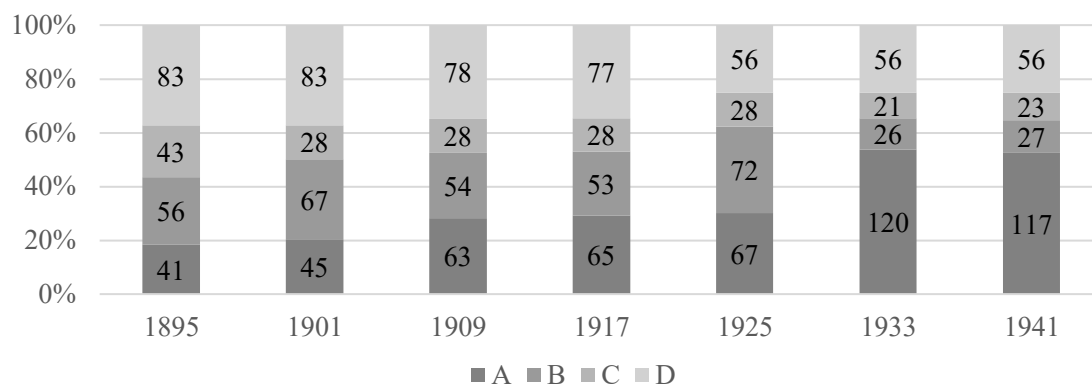


図3 年次別表記対応一致レベルの推移

この結果から、和語の表記は、近代において経年変化で「当用漢字表」ならびに「当用漢字音訓表」の用字法に近づいていく、言い換えると、「当用漢字表」の設計の背景に、それまでの近代における用字法の変化があったことが窺える。最後に、1941年の段階でもDレベルにある56語を観察すると、表6のように、4つのタイプに分類できる。②や③のタイプにも多く語が属していることを考えると、この調査の発展として、「当用漢字別表」や「常用漢字表」との対比や、1945年以降の調査が望まれるだろう。

表6 不一致語のタイプ

概要	語例
①意味・頻度などで第一表記と第二表記が主要と限定の関係にあるタイプ(19語)	逢う, 窺う, 射つ, 捺す, 斬る, 喰う, 応える, 覚る, 棲む, 経つ, 喰べる, 吐(ツ)く, 称える, 啼く, 呑む, 貼る, 護る, 赦す, 互る, 啣う
②「常用漢字表」で訓が採用されるタイプ(12語)	挙げる, 在る, 聴く, 指す, 闘う, 就く, 務める, 做う, 分かれる
③一致に向かう(表記の淘汰)途中段階にあるタイプ(17語)	与る, 蒐める, 検める, 到る, 吝しむ, 怖れる, 随う, 棄てる, 斃れる, 援ける, 為す, 睡る, 遣す, 初まる, 以(モ)つ, 依る
④上記3分類の当てはまらない(7語)	云う, 唄う, 較べる, 乞う, 蒙る, 捉える, 儲ける

#### 4. おわりに

本稿では、『太陽』に続く昭和期の調査資料として、総合雑誌『キング』を選定し、その設計と活用について記した。2節では、資料の選定方法とコーパスの設計について検討し、コーパスの規模や記事ジャンルの構成比率に差異はあるものの、ジャンルや著者の多様性・文体・品詞分布においては『太陽』との連続性のあることが確認できた。3節では、『太陽』と『キングコーパス』を併用して、近代雑誌コーパスと「当用漢字音訓表」にお

ける和語の動詞の用字法の一貫性の推移を調査し、明治期から昭和期にかけて経年変化で、用字法の一貫性が高くなり、「当用漢字音訓表」の設計の背景に近代における用字法の変化があることが明らかになった。今後の課題としては、「常用漢字表」や「当用漢字別表」との対比、「当用漢字表」採用基準との関係、「当用漢字音訓表」不採用語の用字法の調査が挙げられる。

コーパスの構築については、規模の拡張や XML タグの整備など課題は尽きないが、現状のコーパスの規模や記事ジャンルの構成比率に注意しつつ、精力的に『キングコーパス』を活用していきたい。

## 謝 辞

本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費 17J03579「近代における和語の表記の変遷」(代表：高橋雄太)、および、国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」(プロジェクトリーダー：小木曾智信)の成果の一部である。

また、本稿で取り上げた『キングコーパス』の構築に際して、明治大学の田中牧郎先生、国立国語研究所の小木曾智信先生、間淵洋子さん、近藤明日子さんをはじめに多くの方々へ助言・助力を賜った。記して感謝申し上げる。

## 文 献

- 小椋秀樹, 小磯花絵, 富士池優美ほか(2011)『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第4版 (下)』国立国語研究所.
- 講談社八十年史編集委員会(1990)『クロニック講談社の80年』講談社.
- 国立国語研究所(2005)『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』博文館新社.
- 近藤明日子(2014)『『国民之友コーパス』解説書 第1.1版』2018年7月23日確認.  
<[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/cmj/doc/kokumin\\_manual\\_v1\\_1.pdf](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/doc/kokumin_manual_v1_1.pdf)>
- 佐藤卓己(2002)『『キング』の時代：国民大衆雑誌の公共性』岩波書店.
- 社史編纂委員会(1959)『講談社の歩んだ五十年 昭和編』講談社.
- 高橋雄太(2015)『『太陽コーパス』における和語動詞「あう」の用字法』『第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所, pp195-202.
- 高橋雄太(2016)「近代における和語の表記の変遷 —複数表記から単一表記へ—」『国際日本学研究論集』第4号, 明治大学大学院, pp.37-48.
- 田中牧郎(2012)「近代語コーパスにおける資料選定の考え方」『近代語コーパス設計のための文献言語研究 成果報告書』国立国語研究所, pp.13-26.
- 日本近代文学館(1977)『日本近代文学大事典 第5巻 新聞・雑誌』講談社.
- 服部紀子, 間淵洋子, 近藤明日子, 小木曾智信(2016)「『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I雑誌』ver.1.0の公開」『日本語学会 2016年度秋季大会予稿集』日本語学会, pp.157-162.
- 文化庁「当用漢字音訓表」2018年7月23日確認.  
<[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/syusen/tosin04/index.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/syusen/tosin04/index.html)>

## 関連 URL

- |                     |   |
|---------------------|---|
| コーパス検索アプリケーション『中納言』 | <a href="https://chunagon.ninjal.ac.jp/">https://chunagon.ninjal.ac.jp/</a> |
| Web 茶まめ             | <a href="http://chamame.ninjal.ac.jp/">http://chamame.ninjal.ac.jp/</a>     |